

氏名（本籍）	ひびの る み 日比野 ル ミ（愛知県）		
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第 42 ⁸³ 号		
学位授与年月日	平成7年3月24日		
学位論文等題目	〈論文〉プロセスと「空間表現」		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授（美術学部）	榎倉 康二
（論文第一副査）	”	”（ ” ）	越 宏一
（作品第一副査）	”	”（ ” ）	田口 安男
（副査）	”	”（ ” ）	坂本 一 道
（ ” ）	”	助教授（ ” ）	羽 生 出

（論文内容の要旨）

プロセスと「空間表現」

プロセスと空間 / 表現のフィールドを捉えなおす

YEros（イエロス）Mたちへ

溶けてしまえ、魚たち。 / 空間表現のフィールドの限界

- （1） 「作品」の概念的範囲
- （2） 先入観の影響
- （3） 伝達能力における言葉と素材のバランス

YELLOW

/ 空間表現における普遍性と自立性

- （1） 自立性について
- （2） 恒常性について
- （3） 「作品」について

Yellow edge YANAKA

/ 触感覚から離れた要素へのアプローチ

- （1） 「Yellow edge」の素材構造
- （2） メッセージの透過
- （3） 共通点

感触－そこに在ること－／時間と空間をどう捉えるか

- (1) 変化するプロセスが表現内容であること
- (2) 変化には限界があること
- (3) 見つけるという変化を取り入れること

感触－呼吸する空間－／身体性とプロセス

- (1) 素材について
- (2) プロセスについて
- (3) 身体性とプロセス

空間表現の今後／メディアが表現空間をかえる

- (1) 空間表現をとりまく環境について

最初に彼女は現代美術においてインスタレーションというジャンルがどのような意味をもっているのか、また彫刻とか絵画というものと、どのような違いがあるのかを、歴史的な意味での絵画の発生から述べ、自分の作品製作を通して認識された世界を加えながら、これからの空間の捉え方や認識の仕方の変化などを論じている。その後1994年1月7日～12日に芸術大学陳列館で行われた、博士課程研究発表展「YEros (イエロス) Mたちへ」(この題名は展覧会全体の題名で、YErosというのは造語であり、英語のYellowとErosを組み合わせたものである)について語られている。始めに「溶けてしまえ、魚たち。」という題の作品について述べられている、これらの作品は陳列館の一階に展示された作品で、この題名はシュールレアリストのアンドレ・ブルトンの著作である「シュールレアリズム宣言」に出てくる詩の題名「溶ける魚」をもじったものである。この論はわたしたちの物や空間に対する認識の在り方について語られ、名称的な物や空間の見方ではなく、本来人間がもっている潜在的な感性や意識への対応を基本とした物や空間のかかわり方が述べられている。次に「YELLOW」という題が付けられた、陳列館の二階に展示されたインスタレーションの作品について論じられている、ここで述べられているのは、空間に直接関係する作品における自律性の問題で、絵画のフレーム、また彫刻の台座のような制度的な自律性ではなく、空間そのものを取り込んだ世界での自律性の獲得ということについて考察され、光と物との関係に焦点を合わすことによって、インスタレーション作品に自律性を与えられたことについて論じられている。次に「Yellow edge YANAKA」と題された作品についての考察、これは陳列館の三階に展示された作品について述べられている。その展示の時に使われた素材は、今回提出される製作本の表紙にあたるアルミニウムのパンチングパネルである。ここでは先の作品において論じられた光と物の関係から、透過性という問題を新たに引き出し、彼女が町で体験した視覚的な問題と拮抗しながら、イメージの透過性ということが述べられている。

ここまでが昨年、陳列館において展示された作品に対しての考察である。次に「感触－そこに在ること－」と題された作品は、山梨県の白州町においての野外展に出品した作品に対して述べており、自然の四季の変化と作品との即物的な関係と同時に、自然の中で時間に触れながらどこまで作品が作品として成り立つのか、ということが論じられている。次の「感触－呼吸する空間－」と題された作品は、彼女の作品の流れでは一番初期の作品で、ここでは身体のリズムと空間

がもつ環境との触覚的な、また精神的な関係、そして土という絵の具に比較すると、非常に素材としては扱いにくいものを、どのような工程で作品にしていくか、という技術的な側面が述べられている。また最後の「空間表現の今後」では、先の作品から学んだ透過性をメディアに置き換えて情報空間による新しい空間表現の可能性が論じられている。

以上が論文の大まかな要旨である。